国府俳句協会報

理事会だより（8・8）

一、秋季俳句大会の取組み状況報告（市長賞・議長賞は承認された、兼題投句一六二名五一二句）、二部入賞の賞品については事業部に一任。（事業部）
大会当日の役割分担は九月理事会に提示。（総務部）

二、秋の吟行会は予定通り11月7日に国府津海岸で実施。九月にガイドマップを配布予定。（事業部）

三、梅まつり俳句大会の兼題、スケジュール等九月理事会で検討決定することに。（事業部）

四、合同句集原稿の提出は現時点では少なく、未提出グループに提出予定を確認。（山田委員長）

理事会日程　9／12、10／10、（二階大会議室）、11／10（毎月第2木曜日　けやき15時より）

「俳句おだわら」10句抄（684号より）

杉山あけみ　抄出

秘密めく薔薇のアーチのその向かう　陌間みどり
昼ごろにふらりと父の日の長子　寶子山京子
水底に空あり桜散つてをり　伊藤はる子
硝煙や時には怖き蟻の列　小野　菊土
紫陽花や白で始まる進化論　中根登美子
辛い日は蛍袋の中で揺れ　中津川晴江
タバスコを利かせてピッツァ迎へ梅雨　百川　秀子
丸窓に風の気配や新茶酌む　新井たか志
二十四時間熟睡六月のラジオ　瀬戸　正洋
吊橋のカンカン帽は飛びたがる　山田　照子

畠梅乃　抄出

をちこちに王女の名札薔薇の園　関戸わよこ
草笛の音の聞こゆる便りかな　神山つとむ
生き過ぎと思う日のあり衣替え　和田恵美子
戻り梅雨図書館本もねむさうな　峯尾ユキエ
昼ごろにふらりと父の日の長子　寶子山京子
帆を張りて船膨らみぬ青岬　池田　令子
父の忌や川床に姉妹の流れ膝　守屋　まち
ふるさとへ転がりやまぬ青胡桃　伊藤　道郎
派出所の泥新しき燕の巣　一ノ瀬茂代
吊橋のカンカン帽は飛びたがる　山田　照子

■7月号（684号）「競詠10句」より8句鑑賞、4句抄出（1）

それぞれの夏　　庄司　下載

朝涼の猿沢池やさかさ松　　足立　和子

青雫と題された夏の奈良紀行で得られたと思われる八句の中の一句。

作者は猿沢池の近くに宿をとっている。旅に出ると朝早く目覚める事が多い。そして猿沢池に散策に出たのであろう。季語の朝涼が奈良の朝のさわやかさを、さかさ松は多分一緒に映っていたであろう興福寺の五重塔と共に古都奈良の雰囲気を伝えるアイテムとなっている。

会はぬ間に大人の口利く青胡桃　　大佐田うづき

季語青胡桃が良く利いた一句である。

胡桃といえば融通の利かない堅物親父を想起してしまうが、ここは青胡桃である。青年の青であり、意思を持って考えがまとまってくる時期でもあり反発も出てくる。

作者は多分しばらく会わなかった孫をみてその成長ぶりに目を見張り嬉しくもあり、若干の寂しさを感じたことが手に取るように感じられる。青胡桃の力である。

■7月号（684号）「競詠8句」より4句鑑賞、4句抄出（2）

時　　石井　きよ子

採れたての紺そのままに夏料理　　木村　幸枝

「採れたて」「紺」「夏」。これはもう夏野菜の代表である茄子でしょう。「採れたて」ですので、自ら、若しくはご家族が作られた茄子なのでしょう。採れたての茄子は本当に美しい。あの艶の美しさと言ったら！茄子紺という色の名にまでなっています。そして、その色をそのまま残したお料理。この日の食卓の話題はこの野菜のことで持ちきり。賑やかな食卓が目に浮かぶようでした。

梅干すや今年は夫の手も借りて　　齊藤　桂

昨今、梅仕事という言葉をよく聞きます。その代表の梅干し作り。作者は手間のかかる梅干し作りを、毎年一人で作られていたのです。率直に凄いと思いました。でも、今年は違います。力強い味方がいるのです。中七下五から、作者の「夫」への感謝の気持ちや手伝ってもらえる安堵感などが伝わってきました。優しい気持ちにさせていただきました。

息つめて月下美人の開くまで　小澤　純子

月下美人の開花は一大イベントである。
よくテレビなどで放送され、知人や近所の方を招いたりして、その開花を見届けるのである。
この句の味わいは下五の開くまでにあると思う。一義的には今か今かと息を詰めて見守っている時間である。が、一方この「まで」は咲いた後の時間を想起させる。一日花、否一夜花。その華麗な姿故に咲き終えた姿は果敢なく痛ましい。「まで」の一語でそこまでを詠んでいる。

板長のポンと木の芽の香りけり　小野　菊土

おいしそうな一句である。場面はカウンター方式の割烹であることが見て取るようにわかる。料理を楽しむには会話、お酒に加えて料理を作る手際を見ながらというのもある。カウンター席はまさにその場所である。句全体によどみなく流れるリズムがあり「ポン」という擬声語は常套句でありながら板長の動作を含めて良く利いている。そしてけりで留めた事によって山椒の香りをより一層際立てている。

一句抄出

若楓射手の姿を映す床　木村　幸枝
昼の月入江に数多寄る水母　齊藤　桂
赤子捧ぐ貴船祭へ高々と　滝本　敦子
各艇に展がるスピンいなさ来る　星　一義

老猫の眠り深々梅雨の月　瀧本　敦子

出窓で老猫が丸まってぐっすりと寝ています。外には珍しく月。猫は気づきもせず、何かに引き込まれたように寝入っています。逆に、そんな猫を月が見ています。なに故そんなに深い眠りに付いているの？疲れているの？歳のせい？ふと、老猫は私なのではと思いました。下五の季語が不思議な世界へ誘ってくれたように感じました。

車夫二人卯の花腐し眺めをり　星　一義

車夫が二人。長雨故に今日も車を引けないのです。二人は雨を眺め、ただただ止むのを待つしかないのです。本来ならば動くことを生業としている彼らが「静」を過ごさねばないのです。景が鮮やかに浮かぶだけでなく、中七下五が、静かな時が流れ続けていることを一句の中にもりあげています。選び抜かれた言葉の力を感じいただきました。

一句抄出

新樹光飛鳥美人に逢ひに行く　足立　和子
燃えつきて空蝉のごとがらんどう　大佐田うづき
蛍火や闇に余情を曳くことも　小澤　純子
太陽の遍く照らすらいてう忌　小野　菊土

俳句おだわら（8・19〆切り、到着順）

◆小田原鹿火屋（7・26）　久江報

蓮の花分け入る風の清々し　足立　和子
邪鬼払ふ力士の四股や土用入　川本　育子
湯治場や晩夏色濃き奥湯本　高橋　小糸
晩夏光函嶺の襞深きかな　山﨑　悦子
晩夏この波からみ合ふ東尋坊　近藤　久江

◆山北（7・25）　由里子報

退屈の誰かが開ける冷蔵庫　和田恵美子
店先に故郷の名やびわの箱　尾崎　幸子
三伏やビタミン剤の赤い箱　星　一義
ペダルこぐ子らのプールの匂いかな　石田加津子
金魚玉水を一箱注文す　竹下由里子

◆春野（7・21）　きよ志報

みんみんの一山占めてゆるがして　秋山　昇
炎帝に睨まれてゐるやうな気に　伊藤はる子
立ち上る度に膝鳴る日の盛り　内田知江子
孑孑も人もいのちも浮き沈み　尾﨑　一夫
七夕竹不戦の文字の確とあり　瀬戸　悠
帚木の三つ四つあれば童話めき　二見　和江
蜩や「図書館まもなく閉ります」　長谷川きよ志

◆沈丁（8・1）　寶子山報

鹿の絵のカップにあふれソーダ水　若村　京子
秋涼しワイングラスとショパン聴く　柳澤ミサ子
新涼や青空市のブレイキン　田中　恵一
新涼やふと手を見れば蝶のやう　河本　純子
八月や山からは帰る約束　瀧本　敦子
新涼や母の面影鹿の子帯　勝木　澄子
一声（ひとこえ）の鹿よ私に何を問ふ　菅野　英余
新涼や無事終了す再検査　高井　幸子
鹿笛やしばし広野の夜風聴く　片野　節子
爽涼や布裁つ鋏よくすべる　峯尾ユキエ
新涼をまといてくだる天狗かな　清水美代子
暮れてなほ遠く呼ぶ声古都の鹿　松下　俊之
旧友の変はらぬ文字や秋暑し　武居裕美子
新涼や十二ノットで行く小島（をじま）　寶子山京子

◆青梅（8・7）　幸子報

蝉時雨ひとり読書の昼さがり　大塚　行人
杣山の散策が好き草の花　湯本とし子
夏草に今日も追はるる婆の畑　久保寺トミ子

八月も尽きたる海の疲れかな　加藤まり子
赤とんぼ渾名で呼び合ふ友も老い　田中　幸子

◆みなみ（7・20）　かほる報

山百合や地下千尺の水旨し　加藤　富江
サングラス少女は大人になり急ぐ　加藤れい子
抱き上げて子に泣かれけりサングラス　加藤　健治
老斑を濃くして一途に梅を干す　市川めぐみ
サングラス外して母の顔になる　豊田　幸枝
サイドカー犬と揃いのサングラス　斉藤　静
鬼百合や清く生きますこの浮世　小瀬村信子
宍道湖の夕焼け群青までも覧し　柳川　紀枝
背を伸ばし向日葵世情を俯瞰する　加藤かほる

◆香雨・梅ごち（7・28）　忠山報

缶ビール買ひて始まる旅路かな　肥後ちさこ
風死すや生あるものは息ひそめ　関戸わよこ
湯上がりにまづ一杯のビール干す　青山　典子
水打つて日差し和らぐ勝手口　門松　鳳文
しめくくるひと日の疲れ生ビール　吉田　百代
釣り人の無口が並ぶ日の盛り　吉田　康雄
同行の誰も無言や炎天下　陌間みどり
暮れてなほ火照る大暑のアスファルト　小澤　純子
狩行星（ぼし）みつけるまでを夕端居　池田　忠山

◆こよろぎ（8・8）　つとむ報

風鈴がまた風鈴に応へをり　髙杉掘三朗
黄昏や麦酒の友の見舞い来る　板谷　雅泉
釣り人のいつしか土手に三尺寝　植松テル子
咲きみちて町の簪（かんざし）百日紅　神山つとむ

◆おほゐ（8・7）　きよ子報

一つづつ語りかけては梅を干す　香川　花子
敗戦日誰も知り得ぬ明日のこと　加藤　春江
会釈して暑いですねが口ぐせに　瀬戸とみ子
片蔭ややさしい風の通り道　髙橋みどり
六十年二人三脚汗の染み　中根登美子
軒を出て風鈴の音が風になる　中村　昌男
蜘蛛の技庭で新作織り上げる　中津川晴江
ちちの句の揺れて風鈴ちりちりん　廣田　悦子
おつかいや片陰歩くおさなごが　安池　利枝
晩夏光戦下の子らの明日祈る　原　仁子
街中へ一歩踏み出す酷暑かな　松良　榮美
風鈴が涼しさ流す夕の街　吉井源太郎
追憶の風鈴優しははの声　二上　光子
日の丸のパリにはためく今朝の秋　横塚　昌平

風鈴や施設の姉の電話かな　石井千代子
汗光り涙輝く夏五輪　小野　菊土
夜の秋しばし散歩へ誘われ　石井きよ子

◆鷹（8・9）

失念も失言あまた水を打つ　青木　孝子
潮風の通る町民プールかな　池田　令子
三線（しん）のひびく胸裡や仏桑花　西賀　久實
沖一線望む山祠や葛の花　佐宗　欣二
あぢさゐや公民館の読書会　中田　笑子
夏帽や和室に椅子の甘味茶屋　百川　秀子
宍道湖を遠見に車窓明易し　山﨑美知子
蕎麦屋裏に一斗缶積む大暑かな　柏木　良花
紙芝居屋に抽斗多し夏帽子　庄司　下載
樟脳舟ひたに走れり友逝けり　瀬戸　りん
小所帯に日にち百の花木槿　高橋久美子
月光にほぐるる雲や蟬生る　中山智津子
往還に絶えて人なし油照　齊藤　桂
藻の上をさばしる蟹の紅きかな　芹澤　常子
境内を掃く音清し秋隣　深澤　一華
深更や月下美人の雄蕊百　大木　敬子
からすうり咲く平旦のうすあかり　大島美恵子
蟬声や稲荷の宮の力石　田下　昌人
遠雷や一人居の耳敏くなる　中根　和子
南面の大きな窓や盆の月　加藤　幾代
向う岸に夜市あるらし大花火　高橋千代子
梅雨明けにけりういらうの銀の粒　守屋　まち
磯臭き乗換ホーム遠花火　米山　翠
天窓を開けて眼を閉じ夏ねぶつ　來田　新子
かつこつと首振る父の扇風機　青山　典仁
採血の跡押さえたる小暑かな　大沢　年子
病院の静かに混みて夏了る　小林　環
水芭蕉遠見に山の青みたり　澁谷　明子
お屋敷は住む人なしや時計草　下平　美子
頭からことわる話時鳥　鳥海　壮六
晩酌に身のこまがへる浴衣かな　古屋　德男
瀬頭を見つむる夏の終りかな　村場　十五

◆実のり（8・13）

軽やかに單衣の着物献茶式　荒井ちゑ子
ポンポンと西瓜叩いて叱られて　岩本ひさみ
かぶりつく西瓜の種を飛ばす子ら　杉本　久子
三才児正座してをり西瓜切る　木村　幸枝
青空や西瓜の種の限のなし　新井たか志

たか志報

十五報

◆零（8・15）　史郎報

孫二人の昼寝にふわり夏掛けを　青木たけを
山羊が啼く晩夏あざなうようにかな　伊藤　道郎
風吹いて胡瓜は蔓を大振りす　川合　昌子
平和へと虹のかけ橋永遠に　佐藤　正子
空蝉の爪のくい込む葉裏かな　中村　裕子
夏掛けは母の口癖腹に巻け　野川木一路
夕焼は平和のカーテン武器捨てよ　岡本　史郎

◆草むら（8・19）　重満報

敗戦の日吾の人生始まりぬ　石井　秀稀
白蝶の羽搏き烟る夕方は　佃　悦夫
熱帯夜波動関数狂い出す　佐々木重満

◆無所属

花野原いづれひとりの樹木葬　小林永以子
客待ちの食堂暗しスコール来　畠　梅乃
語り部の陣取る屋敷夏炉炊く　北村　文江
老いて似る姉妹のしぐさ心太　一ノ瀬茂代
毬栗のまだやわらかく男逝き　岩楯惠津子
にんげんを見ている風の青大将　大石　雄介
青朝顔ロードスターに乗ってきた　大石　和子
卯の花や声透き通る雨上がり　出澤　洋子
炎天へ出でむと深き息ひとつ　山田　照子
八月尽一汁一肴うまきかな　山本　すみ
夏は逝くとんがっていくこれからも　穂坂志げる
秋場所の懸賞旗に介護柄　神野美代子
天辺は蔓草なびく夏樹林　須田　聡子
耳ふたつ夏逝く風とすれ違う　小澤　園子
アイスカプチーノ眼精疲労かな　瀬戸　正洋
晴マークに雷の音隠れおり　田畑ヒロ子
泳ぎ出す産道くぐりこの世へと　大佐田うづき
夏惜しむシュガーラスクのうまい棒　杉山あけみ
帰省子の一言めには「腹へった」　岡田　典代
台風来地震に雷雨老い少々　杉崎　せつ

無所属会員の皆さまへ

「俳句おだわら」への一句を毎月19日必着でお待ちします。郵便事情を考慮して早めに投函お願いします。（葉書にて）

宛先：250－0042　小田原市荻窪五四九－一七
村場十五（広報部）

◆訂正◆

685号　5頁　勝木澄子さんの句
誤：城址は四方に抜ける青葉風
正：涼風やドクターイエロー引退す

内田知江子

三味の糸二あがりにして夏料理　　田下　昌人

三味線の音を二あがりにすると音は高く明るく響き、気分も浮き立ってきます。ここは「おさらい会」でしょうか？晴れやかな気分の後涼しげな夏料理を戴きながら、今日の奏でをあれこれと話し合う至福の時間です。日本文化の細やかな情緒が聴覚・視覚・味覚で表わされていると思います。素敵な暑気払いが羨ましい。

髙橋みどり

枇杷の実に夕日がまとふ雑木山　　青山　典子

一齣の美しい絵のような句でした。枇杷の葉は大きく葉陰になったり、実の色も目立つ程主張しません。一時の夕日に枇杷の実の黄橙色が色濃く鮮やかだった事でしょう。又まわりの樹々の色も青く輝き、自然の織りなす美しさに感激された事と思います。枇杷の味も美味だった事でしょう。夕日の翌日は晴れると言われ、良い事があるとも聞きます。作者にも「幸あれ」と願っております。

出澤　洋子

母がゐて聞いてもらつて風涼し　　二見　和江

お母様が御存命でいらっしゃるのでしょうか。そのお母様と縁側か庭かで、過ぎし日々の事を不安を愚痴やらも楽しく話していらっしゃる。娘は母へ、母は娘への揺るぎない信頼。そこにとても静かな幸せな時の流れを感じます。もしかして遺影であるかも知れない。それでもそんな良い思い出の時がしみじみ伝わって来ます。そういう関係を築かれた事をうらやましくも思います。

百川　秀子

朝の日をしつかと受けて鉄線花　　小澤　純子

朝の日を受けているのは鉄線花？、作者？いや両方でしょう。心情は一切のべていないが「しつかと」の副詞が効いていて、初夏の日差に凛と咲く鉄線花が見える。クレマチスと混同される事が多いが、この句の鉄線花の響きが良い。作者の晴れやかな朝のスタートが感じられ気持の良い一句。

新作５句

昇　秋山

無住寺の山門閉ざし凌霄花
この里に生れて卒寿や茗荷の子
緑蔭に堅牢地神凝立す
天と居ていつも独りや鉦叩
野仏に光る囲を組み女郎蜘蛛

千代子　石井

三尺玉夏の夜空は貸切に
蝉時雨今日新聞は休配日
かき氷オリンピックの夢果てる
二の腕に力こぶあり秋の水
水澄むや地産地消の道の駅

健治　加藤

八十八夜納屋に見にゆく農事暦
夏めくや何するでなき腕まくり
皿に置けば故山のごとき柏餅
子燕に見とれてをりぬ宅配員
あぢさゐの壁に囲まれ電車着く

まり子　加藤

学舎に混声合唱夏は来ぬ
精悍な三島由紀夫と夏の富士
塾帰り競はず伸びる立葵
石仏の百面相や炎天下
連れ立ちてそぞろ歩きや初浴衣

美代子　神野

ホームラン向日葵の種ふはり飛ぶ
訪問の医師に礼言ふ猛暑日を
ひまはりの揺れに合はせて首振る児
夏五輪居乍らに観る金メダル
車椅子止めて手に触る秋ざくら

一華　深澤

墨堤にスカイツリーや初紅葉
年表をたどる夕べや虫の声
キャンパスに上がる坂道照紅葉
手話歌の指柔らかき秋日和
夕風に神楽鈴の音秋深し

康雄　吉田

沖を見て紫煙くゆらす秋の暮
名園の水琴窟の音のさやか
ほのかなる沖の漁火天の川
秋澄むやフェリーうみだす白き波
旧友とアルバムくりて敬老日

俳人協会俳句カレンダー（二〇二四年二月）

鶯に朝餉の窓を開けにけり　古屋徳男

令和六年度小田原秋季俳句大会

第一部　作品募集

兼　題　「案山子」「柿」（いずれも傍題可）各一句一組
　　未発表作品に限ります。

選　者　協会役員及び各地有力作家（投句者に限る）
　　小田原市長賞以下二十位まで　選者特選賞六人

賞

第二部　俳句大会

日　時　令和六年十月六日（日）

会　場　おだわら市民交流センター（ＵＭＥＣＯ）

受　付　十一時　投句締切：十二時　開会：十二時半

整理費　五百円（呈飲料）

席　題　秋季雑詠二句　総互選

賞　　小田原俳句協会長賞以下五十位まで　参加賞

（主催）小田原俳句協会　（後援）各地区俳句協会

寿齢者表彰　昨年度秋季大会翌日（五年十月十六日）以降六年十二月三一日までに古稀、喜寿、傘寿、米寿、卒寿、白寿を迎える協会員。ただし投句が条件です。

＊会場は飲食可能ですがなるべく各自食事を済ませてご参集ください。参加人数が多数見込まれますので、感染症防止対策にご留意ください。

小田原俳句協会　〒二五〇―〇〇四二　小田原市荻窪五四九―十七　村場　十五方

＊合同句集原稿提出のお願い＊

締切の九月十二日までに未提出の会員は早急に提出を、又は提出予定日を山田編集委員長

☎ 〇四六五―三四―六五四二、

〒250―0055 小田原市久野一一五三まで

ご連絡願います。

秋の吟行会のお知らせ

日　時　令和6年11月7日（木）雨天決行

吟行地　国府津海岸周辺

句会場　国府津駅自転車駐輪場内会議室1階（国府津駅から小田原寄り徒歩2分）会場利用時間（11時から16時）

受　付　11時半から

句　会　13時から　投句：嘱目3句（締切12時半）5句総互選

＊各自周辺吟行、食事をなるべく済ませてご参集ください。駅近くにコンビニ、飲食店あり。（会場内飲食可能）

＊事前申込の必要はありません。お仲間（会員以外も可）をお誘い合わせの上現地にご集合下さい。

担　当　事業部　問合せ長谷川きよ志
　　090（1262）0149